様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０３１１３

研究課題名（和文）児童思春期の愛着形成・修復に資する心理・社会的アプローチの整備

研究課題名（英文）Development of psycho-social approaches to form and restore attachment of children and adolescents

研究代表者
西村　馨（Nishimura, Kaoru）

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：７０３０２６３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：愛着の課題を持つ子どもについて、その問題行動をメンタライジングを軸として理解していく枠組みを構成し、具体的な関わりの原則と手法を整備した。アセスメントや心理尺度の開発を進めつつ、MBT（メンタライゼーションに基づく治療）をベースにした心理療法および心理教育手法の開発と実践を試みた。子どもに対する時間制限心理療法の試行、児童、思春期のグループセラピーの方法論、ファシリテーターの姿勢、技法論、グループプロセスについて論じた。研究代表者の所属機関での実践だけでなく、児童相談所、児童養護施設での実践を支援し、成果を得るに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
児童・思春期の、理解や関与が難しく見える問題行動を理解していくための枠組みを提示し、対応の方針や具体的な方法を提示したことで、教育、福祉、医学領域での実践に貢献した。理論枠組みと手法だけでなく、今後訓練を重ねることで、困難な事例に対する効果的な関わり方、臨床家としての資質を向上させる可能性も含んでいる。また、一般の親・養育者が子どもを理解していくための方法も作り上げることで、関係作りに貢献した。研究の成果のほかに、この研究活動を通した、専門家のネットワーク形成、とりわけ臨床理論、臨床技術の開発とその研修に寄与した。

研究成果の概要（英文）：We composed a framework for understanding the problematic behaviors of children with attachment issues based on mentalizing, and developed specific principles and methods of treatment. While developing assessment and psychological scales, we attempted to practice and develop psychotherapy and psychoeducational methods based on MBT (Mentalization-Based Treatment). The trials of time-limited psychotherapy for children, methodologies of group therapy for children and adolescents, facilitator's attitude, techniques, and group process were discussed. The project supported the practice at the researcher's institution as well as at child guidance centers and children's care units, and achieved positive results.

研究分野：臨床心理学

キーワード：愛着　メンタライジング　児童・思春期　グループセラピー　親支援　心理・社会的介入

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、大人や同世代の仲間との対人関係が形成、維持しにくく、内省力や表現力が低く、行動志向、身体化傾向の高い児童・思春期の事例が増え、大きな問題となっている。彼らが示す厄介な行動に対して、周囲はつい懲罰的になり、彼らを抑制するように反応しがちである。そのような子どもをどのように理解し、親、養育者、あるいは教育者たち、福祉の専門家たちがどのように関わっていくことが有効なのかが問われていた。Bowlby の愛着理論は、極めて有益な視点をもたらす。発達早期の愛着形成の不全は、さまざまな問題行動、精神疾患の直接的原因ではないものの、その重要な温床となっていた。その愛着の質を決定するのは、子どもに関わる重要な人物が子どもの心理状態を的確にとらえる力、すなわちメンタライジングの力である。この、メンタライジングに注目した心理・社会的な介入の開発が、MBT（メンタライゼーションに基づく治療）を中心に、進められていた。

２．研究の目的

本研究は、そのような、愛着の課題を持った児童・思春期の子どもへの心理支援を、問題のレベルに応じて適切なものを想定し、それらの具体像を整理していくことを目的とした。すなわち、愛着に関わる発達課題を、過酷な環境に起因する重篤な障害レベルのものから、問題が非常に軽微な安定した環境で生じる「通常の」発達過程で生じる事態に至る幅を持ったものと考え、それぞれの問題の重篤度に応じた、支援的介入のストラテジーを整備しようとした。一方を、重篤な問題を持った子どもへの組織ぐるみでの関わりとし、もう一方を、特別な問題を想定する必要のない子どもへの家族や地域での日常的指導・ガイダンスレベルとしたとき、本研究はその中間層から重篤な子どもへの支援を主な対象とし、その介入の原則や方法論を、メンタライジングの視点から整理し、その意義を検討することを目的とした（表１参照）。

表1. 愛着の問題の水準と心理・社会的アプローチ

介入水準	トラウマの程度	想定される愛着の型	心理的治療	社会的支援
レベル３ 施設・病棟	深刻な虐待：身体的・性的・心理的	混乱型優勢	愛着焦点化・多元的心理療法	治療的視点の生活場面支援（子隔離）
レベル２a 専門的介入	↑ 中程度の虐待 愛着トラウマ ↓	↑ 回避／両価型優勢 ↓	心理療法 ↕ 支持的・心理教育介入	養育者への愛着焦点化面接 ↕ 愛着心理教育
レベル２b 地域的介入				
レベル１ 通常の地域	愛着の微細な傷つき	安定型優勢	教育場面での心理教育	教育場面での親・教師教育

３．研究の方法

(1) 研究は大まかに言って研究代表者西村によるものと研究分担者上地によるものがある。西村が行うものは、各種施設のフィールドワークとそれに基づくグループ介入のガイドライン作成、そしてそれに基づくグループセラピーの実践とその成果の評価である。一方上地が行うのはメンタライジング能力査定の尺度作成である。本来の計画では、これらが相互連関的に発展して、介入の評価を行うことが一つの目標であった。しかしながら、コロナウィルス感染拡大により計画の変更を強いられ、実現可能な方法として、それぞれが独自の、アプローチ可能な対象との作業を通して研究を展開していくこととした。

	西　村	上　地
レベル共通		査定手法開発
レベル３	入所施設 フィールドワーク	
レベル２b		養育者面接技法
レベル２a	児童思春期グループ 養育者心理教育	

(2)西村の研究として以下のアプローチをとった。

①研究施設国際基督教大学を拠点とした、児童、思春期、親を対象としたグループ活動を協力者とともに展開した。②児童精神科、児童相談所、児童養護施設、小学校特別支援教室などの実践家との連携により、愛着の課題を抱えた子どもへのメンタライジングを軸とした臨床実践を紹介し、検討する作業に携わった。③児童相談所、児童養護施設、スクールカウンセリング、特別支援教室での臨床・教育活動に指導的に関わることで新たなプロジェクトを発展させていくことを試みた。

(3) 上地の流れは以下の通りである。

①メンタライジング能力の査定およびそれに関連する能力の査定のための 2 つの心理尺度の開発を試みた。②国内の、メンタライジング能力査定に関心を持つ研究者のネットワークの形成を支援し、その交流、議論の発展を促した。

(4) なお、研究を推進していく過程で、臨床実践や研究について、英国ロンドンの Anna Freud

（旧 Anna Freud National Centre for Children and Families）のファカルティスタッフの指導を受けたり、日本の臨床家との交流の場を作ったりした。

４．研究成果

(1) 児童のグループセラピー

国際基督教大学教育研究所で 2020 年 3 月まで開催されていた男女別の児童のグループの実践から、さまざまな知見が得られた。主要なものは以下のとおりである。

①神経発達症児、特に自閉スペクトラム症（ASD）児童はメンタライジングや愛着の形成が難しいとされているが、活動を用いたグループにおいては、情緒交流を促進し、社会性を向上させる上で独特の意義が見いだされた。他者との関係構築は簡単ではないが、象徴的なやり方でつながりを表現していることが見いだされ、その様式を理解することで、「つながる」ことができ、親子関係を改善させたり、仲間関係を発達させることが見いだされた。②集団状況でトラウマ的出来事を体験した（しばしば不登校状態にある）ものにも、グループは安心感を回復させるうえで有益な手法である。しかし、その過程でスタッフに対する情緒的な攻撃が昂じることがあり、スタッフには大きな負担が生じる。この過程において、子どもの行動の意味を理解する、すなわちメンタライジングできるようになることが極めて重要な意義を持つ。しかしそのためには、スタッフが同僚やスーパーバイザーとの間で十分に安心感を体験し、情緒的負荷を抱えらえる体験をすることが欠かせない。それらに基づいた、正直な、嘘のない関りは、子どもの心に強い影響を与え、率直な感情表現の関係を作ることを助ける。③学校外の地域資源としてのグループは、スクールカウンセリングや教育相談的機関とつながれない、傷つき体験を抱えた子どもと親にとっては貴重な機会を提供する場となりうる。

それらは複数の雑誌論文として掲載されたり、専門書の１章に収録された。

(2) 思春期のグループセラピー

児童のグループと同様に、2020 年 3 月まで開催されていた男女別の中学生のグループの実践から、さまざまな知見が得られた。主要なものは以下のとおりである。

児童のグループと同様に、活動を媒介としたグループは、神経発達症を持つ子どもにも、学級で孤立した子どもにも有益である。社会的スキルが十分でなかったり不安が高かったとしても、グループでの交流に対して意欲があれば、スタッフのメンタライジングによって情緒的安心感を得たり、歪みのある対人関係のとらえ方を少しずつ話し合って現実的なものにしていくことで、関係性が安定していく。そこから、仲間同士のやり取りの中で相互の信頼感・愛着を高め、自己像の修正が行われたり、将来展望への希望を持てるといった変化がもたらされる。

それらは複数の雑誌論文として掲載されたり、専門書の１章に収録された。

(3) 親の心理教育グループ

児童のグループに参加している子どもの親を対象としたグループ活動を 2020 年 3 月まで行っていた。メンタライジングをキーワードとしたグループ活動の枠組み、ファシリテーターの基本姿勢、心理教育素材、グループの進め方、介入の仕方を整備して、手法としてまとめることができた。メンタライジングをキーワードとして、子どもの理解の仕方や関わり方を学んでいくことには有効性があると考えられた。子どもとの情緒的ヒートアップや関係の悪化には、必ず、親自身の情緒がかき乱されたために、子どものメンタライジングができなくなることが関わっている。そして、即効性の高い「特効薬」を求めるようになってしまう。そのプロセス自体を説明し、自分が体験することを冷静にとらえ直すことで、自身の安心感が回復し、次にできそうなことが見えてくるようになる。グループの中で、メンバー（親）同士がお互いをメンタライズし、支え合うことが、プロセスに大きく貢献していた。このグループの基本枠組みは、さまざまなタイプの養育者にも適用可能である。

それらは複数の雑誌論文として掲載されたり、専門書の１章に収録されたほか、専門家のための学会での招待講演で発表した。

(4) 各種現場での愛着の問題を持つ子どもへのメンタライジングを意識した介入

メンタライジングを意識した臨床実践を行う専門家とのネットワークを形成し、それぞれの実践を紹介し、その意義を検討した。

一つの方向としては、児童精神科や児童相談所における、通常の治療面接・診察の中で、メンタライジングを意識して、関わっていく方法である。それは、Anna Freud が展開している MBT-C（児童対象のメンタライジングに基づく治療）を導入していくことで、より短期間で、目標を焦点化した効果的な治療を展開することを可能にした。

しかしそれにとどまらず、神経発達症や軽度精神遅滞を抱えた児童のための小学校通級教室においても、その授業において、子どもの発達水準に応じて、メンタライジングを促すための素材や道具を工夫し、進め方を緻密に構成していくことで、メンタライジングを高め、人間関係を安定させ、適応状態を改善させることが可能であることが報告された。

また児童養護施設においても、心理士による心理療法ではなく、施設内で子どもの日常生活を支援する職員（保育スタッフ）との関係において、愛着をめぐる様々なトラブルが生じることに対して、メンタライジングを活性化させてお互い理解しあうことで、愛着を深め、トラブルを収

束する方法が報告された。
　すなわち、狭い意味での心理療法的介入にとどまらず、教育の場面や施設の居住空間で、日常生活における愛着の形成・修復が、メンタライジングを通した実践によって、可能となるのである。その際、「メンタライジング」という新たな手法として紹介するのではなく、すでに行っている日常的営為の意義を再確認することで、実践家の感覚に沿った形で広がっていくと考えられた。
　また、上記のグループセラピーと同様、子どもは、成長、修正発達の過程で、スタッフに対して、情緒的な負荷の高い関りをすることがある。それは非常にストレスを高めることであり、そのスタッフを組織全体で支援していく体制が必須であると考えられた。
　それらは複数の雑誌論文として掲載されたり、専門書の１章に収録されたほか、専門家のための学会での招待講演で発表した。

(5) メンタライジング能力測定のための尺度
　上地は、「乳幼児の親に対する養育省察機能質問票」と「サザンプトン・マインドフルネス質問票日本語版(SMQJ)」を作成した。それぞれに一定程度の妥当性・信頼性が確認された。

(6) 新たなプロジェクトの立ち上げ
　研究の方法で述べたとおり、研究代表者自身の実践や調査がコロナ禍で不可能となったために、むしろ、現場の専門家の実践を助ける流れができ、それが結果として様々なメンタライジングを意識した心理・社会的介入を広げることをもたらした。児童相談所での里親・里子支援のためのグループプログラム、そして、児童養護施設でのグループなどの知見がもたらされた。児童養護施設の子どもたちには、施設生活が長くなるにつれ、主体性が薄れやすいという問題がある。メンタライジングを意識した介入によって（数名の子どもは、グループと個人療法の両方に参加している）、子ども自身の主体感覚に関心が寄せられ、刺激されることで、より積極的な生き方をするようになったことが観察されている。
　また、学校でのカウンセリング場面では、構造の明瞭な時間制限式 MBT-C とは異なり、複数の人が関わるさまざまな問題に柔軟に対応していく必要がある。神経発達症を持った子どもに、メンタライジング姿勢でかかわり、担任や親と関わっていくことで、子どもが変化していくことも観察された。
　これらの成果は、一部投稿論文として刊行されているが、一部は学会で発表されたり、専門家向けのシンポジウムにおいて発表され、議論されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Nasu, R., Kimura, Y., &Nishimura, K.	４．巻 10
２．論文標題 A mentalizing approach to treating children with attachment trauma in group: Experiences from two cases	５．発行年 2022年
３．雑誌名 FORUM [Journal of the International Association for Group Psychotherapy and Group Processes]	６．最初と最後の頁 76-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 西村馨	４．巻 32(1)
２．論文標題 メンタライゼーションを高める子どものグループ、親のグループ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 思春期・青年期精神医学	６．最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上地雄一郎・小川紗有美	４．巻 第20号
２．論文標題 乳幼児の親に対する養育省察機能質問票を開発する試み	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岡山大学臨床心理学論集	６．最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上地雄一郎	４．巻 第20号
２．論文標題 サザンプトン・マインドフルネス質問票日本語版(SMQJ)作成の試み	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岡山大学臨床心理学論集	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木村能成・西村馨	4．巻 31(1)
2．論文標題 グループセラピーにおける愛着に課題を抱えた思春期男子の成長－「甘え」からメンタライジングへ－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 思春期青年期精神医学	6．最初と最後の頁 45－54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西村　馨、高橋　伸、木村　能成、那須　里絵	4．巻 64
2．論文標題 子どもの心の成長に寄与するキャンプ実践	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国際基督教大学学報．I-A 教育研究　= Educational Studies	6．最初と最後の頁 117～124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34577/00005108	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 西村馨・崔炯仁・白波瀬丈一郎	4．巻 37(2)
2．論文標題 グループ設定でのMBT（メンタライゼーションに基づく治療）入門	5．発行年 2021年
3．雑誌名 集団精神療法	6．最初と最後の頁 220-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 那須里絵・西村馨	4．巻 63
2．論文標題 グループセラピーの方法論－現代思春期の心理的発達を支援する方法として－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育研究［国際基督教大学教育研究所］	6．最初と最後の頁 113-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34577/00004797	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木村能成・那須里絵・西村馨	4．巻 36(1)
2．論文標題 子どものグループセラピーにおけるメンタライジングアプローチの意義－アタッチメントに課題を持つ子どもの成長に向けて－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 集団精神療法	6．最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 那須里絵・岡本美穂・西村馨	4．巻 46(4)
2．論文標題 児童虐待による『隔絶感』の克服に貢献する思春期女子グループの意義	5．発行年 2020年
3．雑誌名 精神療法	6．最初と最後の頁 83-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 那須里絵・西村馨	4．巻 30(2)
2．論文標題 孤独感を抱えた思春期女子へのグループセラピー：サブカルチャーから生の人間関係へ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 思春期青年期精神医学	6．最初と最後の頁 120-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西村馨・木村能成・那須里絵	4．巻 62号
2．論文標題 児童・思春期の治療的・発達促進的グループにおけるセラピストの姿勢	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育研究［国際基督教大学教育研究所］	6．最初と最後の頁 137-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 西村馨	4．巻 36巻1号
2．論文標題 学校教育相談の周辺資源としてのセラピーグループ ―「心を理解する」連携・協働に向けて―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 集団精神療法	6．最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 那須里絵・西村馨	4．巻 29巻2号
2．論文標題 「2.5次元の場」としてのグループ－思春期女子のグループセラピーの実践から－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 思春期青年期精神医学	6．最初と最後の頁 119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木村能成・西村馨	4．巻 29巻2号
2．論文標題 傷つきを抱えた思春期男子の「甘え」の意味―苦しさに触れるために－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 思春期青年期精神医学	6．最初と最後の頁 122-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 那須里絵・木村能成・西村馨	4．巻 66
2．論文標題 スクールカウンセリングにおけるメンタライジング・アプローチ― 不登校や発達障害の子どもに関わるヒント―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 教育研究	6．最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34577/0002000159	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 西村馨	4．巻 229
2．論文標題 メンタライジングに注目した親と子への心理的支援	5．発行年 2023年
3．雑誌名 こころの科学	6．最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 家崎咲代・西村馨
2．発表標題 児童養護施設における思春期グループへの挑戦～メンタライジングをグループで志向する取組～
3．学会等名 日本メンタライゼーション研究会第3回学術集会
4．発表年 2023年

1．発表者名 木村能成・那須里絵・宮澤順子・西村馨
2．発表標題 スクールカウンセリングにおけるメンタライジングアプローチ：発達障害の子どもに関わるヒント
3．学会等名 日本メンタライゼーション研究会第3回学術集会
4．発表年 2023年

1．発表者名 上地雄一郎・石谷真一・北原祐理・西村馨・渡部京太・佐藤一・那須里絵・久保田まり
2．発表標題 子どもの心のメンタライジングー愛着の形成・修復のための研究と実践
3．学会等名 科研費18K03113　基盤(C) 児童思春期の愛着形成・修復に資する心理・社会的アプローチの整備 成果発表
4．発表年 2024年

１．発表者名 家崎咲代・西村馨
２．発表標題 被虐待児のコンバインドセラピー事例ー児童養護施設におけるメンタライゼーション・アプローチを使った思春期のグループの導入
３．学会等名 日本集団精神療法学会第41回学術大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 西村馨
２．発表標題 メンタライジングの臨床、はじめの一歩－グループの実践について
３．学会等名 日本メンタライゼーション研究会第2回学術集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 森一也・串田未央・西村馨
２．発表標題 メンタライゼーションに基づく治療グループの実践
３．学会等名 日本心理臨床学会第41回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 西村馨(上地雄一郎・牛田美幸・齊藤万比古とのワークショップ)
２．発表標題 メンタライゼーションを高める子どものグループ、親のグループ（子どもへのメンタライゼーションの活用）
３．学会等名 日本思春期青年期精神医学会第33回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 揖斐衣海・西村馨・大橋良枝
２．発表標題 子育てに孤立感を感じる母親たちの短期集中グループ：孤立感からの脱却のカギとは？
３．学会等名 日本精神分析的心理療法フォーラム第10回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 西村馨（尾上明代・秋田悠希・相田信男とのワークショップ）
２．発表標題 グループにおけるメンタライジングの意義－思春期グループでの工夫（グループにおけるメンタライジング：その体験的発見と可能性の探求）
３．学会等名 日本集団精神療法学会第39回学術集会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 那須里絵・西村馨
２．発表標題 「2.5次元の場」としてのグループ：思春期女子のグループセラピーの実践から
３．学会等名 日本思春期青年期精神医学会第32回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木村能成・西村馨
２．発表標題 傷つきを抱えた思春期男子の「甘え」の意味－苦しさに触れるために
３．学会等名 日本思春期青年期精神医学会第32回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 西村馨
２．発表標題 親のメンタライゼーションを育てる心理教育グループ
３．学会等名 第1回親子のためのメンタライジング・アプローチ研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 木村能成・那須里絵・西村馨
２．発表標題 「愛着の課題」を抱えた子どもに対するグループアプローチ－活動集団療法での実践を通して
３．学会等名 日本集団精神療法学会第37回学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 那須里絵・西村馨
２．発表標題 愛着トラウマをかかえた子どものグループセラピー
３．学会等名 日本集団精神療法学会第37回学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 那須里絵・西村馨
２．発表標題 児童期女子のグループセラピーにおける子どもの嘘と甘えの意味
３．学会等名 日本集団精神療法学会第35回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 木村能成・西村馨
２．発表標題 自閉症児の情動調整機能発達：活動‐面接集団療法における男子中学生の成長を通して
３．学会等名 日本集団精神療法学会第35回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Rie Nasu, Miho Okamoto, & Kaoru Nishimura
２．発表標題 Power of peer relationships to overcome trauma: An adolescent girls’ group
３．学会等名 20th Congress of International Association for Group Psychotherapy and Group Processes（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 木村能成・西村馨
２．発表標題 『学校でそれやったら終わりだよ！』－児童期グループにおけるメンタライゼーション－
３．学会等名 日本心理臨床学会第37回秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 那須里絵・西村馨
２．発表標題 子どものグループセラピーにおけるメンタライジングアプローチ－児童期と思春期のグループを比較した検討－
３．学会等名 日本心理臨床学会第37回秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 木村能成・那須里絵・西村馨
２．発表標題 児童・思春期の子ども達を対象とした野外キャンプの取り組み―子どもの成長する力に着目して―
３．学会等名 日本集団精神療法学会第36回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡部京太・西村馨・田渕賀裕・中里容子・中村慎
２．発表標題 子どものグループを考える－施設に入所している子どもとの集団精神療法の実践を通して治療構造を考える
３．学会等名 日本集団精神療法学会第35回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 ミッジリーN、ブルーヴァI、西村馨・渡部京太（監訳）	４．発行年 2022年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 296
３．書名 子どものメンタライジング臨床入門 －個人、家族、グループ、地域へのアプローチ	

１．著者名 ロソーT、ウィーヴェM、ヴルーヴァI、西村馨（監訳）	４．発行年 2023年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 256
３．書名 メンタライジングによる青年への支援：MBT-Aの実践ガイド	

１．著者名 西村馨	４．発行年 2022年
２．出版社 岩崎学術出版社	５．総ページ数 207
３．書名 実践・子どもと親へのメンタライジング臨床－取り組みの第一歩	

１．著者名 ミッジリーN他、上地雄一郎・西村馨（監訳）石谷真一・菊池裕義・渡部京太（訳）	４．発行年 2021年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 287
３．書名 メンタライジングによる子どもと親への支援：時間制限式MBT-Cのガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	上地　雄一郎 (Kamiji Yuichiro) (80161214)	岡山大学・社会文化科学研究科・特命教授 (15301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関